

## 宇宙生命哲学者大いに語る 第8回

宇宙から地球を観て  
考えること

北里環境科学センター名誉顧問 伊藤 俊洋

## はじめに

「宇宙生命哲学」の大切な決まり事は、常に宇宙から地球を観る感覚で物事を考えることである。人類史上、実際に宇宙から丸ごとの地球を観た人は、米国・アポロ計画の月面着陸に関わった12名の宇宙飛行士だけである。1969年7月20日、アームストロング船長が月面に、人類の第一歩の軌跡を残した瞬間の映像を今も鮮明に覚えている。あれから55年、新たな人類の月面着陸計画（アルテミス計画）が、装いも新たに始まっている。日本の月着陸船「S

LI-M」の成功もその一歩である。

宇宙へ行ける人は、ほんの一握りの人たちである。そこで、宇宙に行かなくても、地球上で宇宙を疑似体験できる装置を作ってみた。講演会場にその装置を持ち込んで、100名余りの聴衆と、漆黒の闇に浮かぶ地球と月を宇宙の彼方から眺める感覚を共有した。

宇宙から地球と月を見る  
疑似体験の試み

ヒマラヤ山脈や南極大陸など、訪れるのが困難であった地域が、装備や技術の進歩で、かなり手軽な観光地へと変貌した。今や、宇宙が次世代の有望な観光地になるうとしている。月旅行もその1つで、アメリカ航空宇宙局（NASA）が主導し、NASAが契約している米国の民間宇宙飛行会社、欧州宇宙機関（ESA）、日本の宇宙研究開発機構（JAXA）、カナダ宇宙庁（CSA）、オーストラリア宇宙庁（ASA）などの国際パートナーによって実施されるアルテミス計画の有人月面着陸ミッションが20

26年に予定され、日本人の月面着陸も計画されている。

何を目的に月へ行くのだろうか？ 月から見える景色は、地球と太陽と満天の星である。その中で、人々にひときわ大きな感動を与えてくれるのは、我々が棲む母なる地球であろう。人類を含めて、すべての生命を育んできた生



宇宙空間で太陽光を受ける地球と月の模型

命の星を、宇宙空間から自分の目で観る感動は、想像に難くない。人類の究極の望みの一つは、宇宙から、漆黒の闇に浮かぶ地球の生の姿を見ることにある。

この経験を、地球上で疑似体験する装置を作ってみた。天井と床と壁を暗幕で覆い、真っ暗にした部屋の天井から蛍光塗料で青く塗った直径10

センチメートルの球（地球）を吊るし、その球から2・5

メートル離れたところに、黄色く塗った直径2・5センチメートルの球（月）を吊り下げた（図は実験場の地球と月の模型）。LEDブラックライトで2つの球を照射し、照明を消すと、漆黒の闇に、青く輝く地球と、黄色く輝く月が宇宙空間の位置関係を縮小した三次元の像として浮かび上がってきた。暗黒のしじまの中に佇む孤独な生命の星を、遙かな宇宙から見ている感覚である。

このシステムを講演会場に持ち込んで、聴衆の皆さんと「宇宙」を共有する企画を立てた。講演会場のステージ背面を黒幕にして、会場全体を宇宙空間に見立て、会場の照明を消してブラックライト（太陽）を照射すると、漆黒の闇の中に青い地球とオレンジ色の月が浮かび上がって見えた。

講演会の本番では、「宇宙」の疑似体験が予想以上に好評であった。次回は、物音ひとつしない漆黒の闇の中で、青く輝く地球を眺めながら瞑想する時間を、十分に長

く取りたいと思っている。

宇宙科学の研究は別として、巨額な経費を使い、物見遊山で宇宙に出かける時ではない。地球上で様々な疑似体験をすることにより、地球環境の愛おしさを認識し、地球環境の保全に集中すべき時である。38億年という長い生命の歴史の中で、ひときわ賢く進化したはずの人類が、今、国境を挟んで、血で血を洗う凄惨な戦争に明け暮れている。この惨劇を目の当たりにして、我々は、なす術もなく立ちすくんでいる。

宇宙から地球を見ると、人類が勝手に引いた国境などどこにも見えない。人間以外の生物は、国境とは関係なく、自由に地上や海の中を移動しながら、生物本来の「生」を全うしている。戦争の指導者たちは、宇宙空間の疑似体験をすることで、自分達の所業の愚かさに気がついてくれるだろうか。

この演示実験は、まだ生まれたばかりで、発展途上にある。多くの方からのご協力により、新しい文化、宇宙アトへと発展することを願うものである。